

第10回 万葉こども賞コンクール

【作文の部 最優秀賞】

梅村 琴音 さん

岩手県在住 岩手県立一関第一高等学校附属中学校2年

題材とした万葉歌

天の海に 雲の波立ち 月の船 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ

巻七 一〇六八 柿本人麻呂歌集

「——」とことごとこと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。」

これは、私の住む岩手県花巻市の偉人、宮沢賢治の、『銀河鉄道の夜』の一場面だ。私には、柿本人麻呂「天の海に」と『銀河鉄道の夜』が重なって見える。

それは、夜空にもう一つの世界を夢見ていることだ。どちらの作品にも、風が吹き水が流れ、波が立ち、乗り物が浮かび、幻想的な夜空の世界がくり広げられている。

万葉集の中には、細い月を恋人の肩に重ねたり、弓に例えたりしている和歌があるが、月を船に見立てて、夜空全体を一つの世界と捉え歌にしたのは柿本人麻呂だけだ。千年以上もの時間差があり、しかも奈良と岩手という遠く離れた土地で、同じような夢を抱いていたと思うと胸が躍る。

また、この歌と物語は、どちらも情景描写が繊細で、読み手の頭の中に鮮やかな情景が浮かび上がる。宮沢賢治はともかく、たった三十一文字の中にそれだけの鮮やかさを表現した人麻呂が、歌聖と称されるのにも頷ける。

このような、夜空をモチーフにした作品が千年の時を超えてあることには、まだ高い建物がなく、まばゆいばかりの街の灯りもない時代の、空の美しさがあったという理由があると思う。今では文明の発達に伴って、当時のような美しい夜空を見上げることは容易ではないだろう。だからこそ、現代に生きる私たちは、澄んだ夜空にある空想の世界を表現した作品に心惹かれるのではないだろうか。

忘れもしない3・11、数日間停電が続き、寒さと不安の中で見上げた夜空には、星がまたいたっていた。一つひとつの星がそれぞれ自分の色で輝き、月はその中をゆっくりと進む。宮沢賢治や柿本人麻呂が描いたような、夜空に広がるもう一つの世界を思わせる、美しく切ない夜だった。

あの月の船は、千年の時を越え、いつか銀河ステーションにも立ち寄るのだろうか。そんな空想をしながら夜空を見上げるのもおもしろい。ほら、天上の海の中、雲の波を立てて月の船が進んでいくのが見えてきた——。